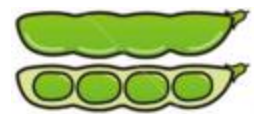


= 元気な豆太郎兄弟のお話し = 嶋田 紅子

# 元気な豆太郎兄弟のお話し

嶋田 紅子



さやさやと風渡る、おじいさんのえんどう豆畑。 幾重にも重なって、連なって、たなびく、強く、青々と、丈夫に育ったえんどう豆の木々の、そのいちばん先頭の本のてっぺんに、ある年、ぽっくりと生った、元気な、元気な、豆太郎兄弟のお話しです。

—

えんどう豆の豆太郎兄弟は、四人兄弟。 ひとつ莢のなかに、横一列、きちんと並んで育ちました。 いちばん最初の豆の名前は、一郎太豆といいました。 一郎太豆は、からだもまるまると大きくて、どちらかという太っちょでした。 力もいちばんありました。 にばんめの豆の名前は、二郎太豆といいました。 二郎太豆は、すらっと実がしまっていて、格好がよく、とてもハンサムな豆でした。 お肌も、ぴかぴかした緑色。 それに、なんととっても、お行儀がすばらしく良いのでした。 さんばんめの豆の名前は、三郎太豆といいました。 三郎太豆は、とりわけて一郎太豆ほどの力もちでも、二郎太豆ほどのハンサムでもありませんでしたが、おとなしくて、お利口な豆でした。 あまりおしゃべりは得意ではありませんでしたが、ひとりで、じいっと、考えごとなどしているのが好きなのでした。 いちばん先っぽに育った豆は、末っ子の四朗太豆。 四朗太豆は、ほかの豆たちに比べると、まだ、からだも小さくて、甘えん坊。 話しかけられると、少し、もじもじしてしまいます。

よっつの豆たちは、ぴたりと並んで、いつもいっしょに、たとえば畑をさあっと渡ってゆく風の音や、急に降りだした雨が、葉の表面を、ぼつぼつと叩く音などを聞いて育ちました。 お日さまの光を、それこそいっばいに浴びたので、夏の初めには、まだ点々のように小さかったからだも、やがて日差しがどんどん強くなって、青く澄んだ空に、まっ白い入道雲がもくもくと立つ頃にもなりますと、もう、ぷくぷくとなつて、莢のなかで、押し合い、圧し合い。 今にも、誰か、弾けて外へ飛び出してしまいそうです。 この分なら、収穫の日も、きっと、もう、そう遠いことではありません。

早く外の世界を見てみたくなって、おじいさんが、ちょきちょき鋏を片手にそばを行き来するたびに、よその畑を耕して、耕運機がぶるぶるエンジン音を高鳴らせるたびに、あぜ道を行く人たちの、とても楽しげな話し声が、すぐ横を通り過ぎて行くたびに、みんな、胸を、わくわくと躍らせて、青緑色の莢の向こう側に、じっと凝らして見る、まだ見ぬ、眩しい、眩しい、光いっぱいの世界へと、それぞれの思いを馳せていました。

「ああ、まったく外の世界というのは、いったいどんな風なんだろうね……。早く、外へ出てみたいー。」

ぽっとひとつため息をついて、一郎太豆が言いました。 いちばんお兄さんの一郎太豆は、好奇心も旺盛で、そのせいか、どうにも近頃、殊の外そわそわと落ち着きがありません。

「外の世界へ出たら、僕は、誰よりも遠くへ旅をするぞ。 まだ誰も知らない世界まで旅をして、みんながびっくりするようなものを、たくさん見るんだ。 もしもどこかに困っている人たちがいたら、きっと、助けてあげるんだ。」

すると、そのとなりで、少しさめたようすの二郎太豆が言いました。

「いや、僕は決して遠くへ行こうだなんて思わないよ。 だって、兄さん。 遠くへ行くということは、それだけあっちこっち、ごつごつと、よけいにぶつからなきゃあならないということさ。 そんなことをして、傷だらけになるなんて、僕はごめんだね。 所詮ものごとを距離で計ろうなんて、ばかげたことさ。僕は、それよりは、よっぽどきちんと箱に詰められて、誰か、僕をたいせつにしてくれる人のところへ旅をしたいものだね。」

「一二郎太豆兄さんなら、きっとそうなるに決まっているよ。」

二郎太豆の言ったことが、正直のところあまりよく分からなくて、答えに困った一郎太豆が、すっかり黙り込んでしまっていると、そのかわり、向こう隣りの三郎太豆が、そう静かな口調で答えました。

「だって二郎太豆兄さんは、格好がいいし、それにお行儀がとてもいいんだもの……。」

べつに、三郎太豆が、二郎太豆に、お世辞を言ったというわけではありません。 第一、そう言われた二郎太豆本人が、頭のなかで、どこかのとてもすてきなし

ストランに行って、それこそ腕のたつえらい料理人に、最高級のおしゃれをしてもらっている自分の姿を思い描いて、それはむしろ当然のことだぞと、誰よりも強く思ってしまう始末なのです。

「そういう三郎太豆は、どこへ行きたいんだい？」

今度は、一郎太豆が三郎太豆にたずねました。

一そう言われてみれば、三郎太豆は、普段はあまり自分のことを話しませんから、なるほど、それは、ちょっと興味のわくところでした。

いったい、三郎太豆はなんと答えるだろう一？

ふたりのお兄さん豆たちは、しばらく、耳をじいっとすませて、三郎太豆が、なにか言うのを待っていました。

三郎太豆は、困ってしまいました。

もちろん、三郎太豆にだって、行ってみたいところはあったのですが、だからと言ってそれを口にだして言うのには、はたして少しばかり勇気がいるのです。

結局三郎太豆はなにも言えなくなって、ただ、まごまごしていました。それでも、あまりに何度もせつかれるものですから、ついには、あまり自信のない小さな声で、こう言いました。

「僕は、学校へ行ってみたいな。 学校へ行って、遊んだり、お勉強をしたりしてみたいな・・・。」

そうなのです。 三郎太豆は、毎日、畑のあぜ道を通って学校へ通う子供たちの、とても楽しそうな話し声や、笑い声を聞いているうちに、学校って、いったいどんなところだろうな。 いいなあ。 僕も、行ってみたいなあ・・・。 いつの頃からだったでしょう、そう思うようになっていたのです。

けれども、三郎太豆が心配していたとおり、それを聞いたふたりのお兄さん豆たちは、とたんに、口を揃えて笑いだしました。

「三郎太豆。 たしかにおまえは、お利口で、とても良い豆だけど、だからって、それはちょっと無理な話だよ。 だって、えんどう豆は、学校へ行って子供たちと遊んだり、机を並べてお勉強したりしないんだからさ。」

二郎太豆はそう言うと、また、転げ落ちそうないきおいで、けたけたと笑いしました。

三郎太豆は、悲しくなっていました。分かっていただけではありませんでしたが、ふたりのお兄さん豆たちに同時に笑われてしまい、ほんとうに、言いようもないくらい悲しくなってしまったのです。悲しくて、悲しくて、そのうちには、だんだんと悔しくなってきた、もう少しで、涙も溢れてこようかというところでした。だけど泣いたって仕方がありません。ただ口を真一文字に固く結んで、じいっと我慢をするのでした。

さて、最後はいちばん小さい四朗太豆の順番です。

四朗太豆は、いったいどこへ行きたいと言うのでしょうかー？

しかし、それを聞いたところで、四朗太豆は、いつものように、もじもじ、もじもじ、しています。

あんまりいつまでも、もじもじ、もじもじ、しているものですから、さすがにどの豆も、すっかり退屈してしまって、ねえ、もういいよ、四朗太豆は、話さなくて、とか、あーあ、誰だよ、四朗太豆にも聞いたのは、とか、今にも誰かが言いそうでした。ふと、莢の外で、人の話す声がします。耳をそちらへそばだててみますと、一方は、いつも聞こえているおじいさんの話し声、そして、もう一方の、あまりはつきりしない小さな声は、小学生くらいの男の子のものでした。

「みのるくんだな。」声を少しひそめるようにして、一郎太豆が、二郎太豆に言いました。「おじいさんに連れられて、畑に遊びに来たんだな。」

「きっと、また、パパとママがお出かけで、ひとりぼっちにされちゃったんだね。」

二郎太豆がそう言って、答えました。

みのるくんが来ているってー？！

一方それを聞いた四朗太豆は、とても嬉しくなりました。あんまり嬉しくて、嬉しくて、莢のなかで、くるっとまるまりたいほどです。末っ子の四朗太豆は、ときどきおじいさんに連れられて畑へやってくるみのるくんのこ

とが、大好きだったのです。なぜって、ひとりっこのみのるくんは、気が弱くて、甘えん坊で、なきむしで、お話しがへたくそなところまで、四朗太豆とそっくり。なんだか、友達のように思えたのです。

みのるくんって、どんな子かな？ 僕は、外の世界へ出たら、みのるくんに会ってみたいなー。

四朗太豆は、ずっと、そう思っていたのでした。

## 二

それから四、五日が過ぎた、ミンミン蝉がうるさく鳴きたてるある朝のこと。遠くにしていた忙しいおじいさんの鋏の音が、どンドンと近くなる。いよいよ、豆太郎兄弟たちの収穫の日がやって来ました。

パチ、パチ、パチ、ちょっきん。

おじいさんが、豆太郎兄弟たちの莢を切り落としました。切り落とされた兄弟たちは、莢ごと、根もとに置かれた段ボール箱のなかへ、急降下。着地のしょうげきで莢のてっぺんがぱっくりと割れて、まずは一郎太豆が、ぽーんと外へ飛び出しました。

「一郎太豆兄さぁん、大丈夫う？」

心配した他の兄弟豆たちが、莢のなかから呼びかけますと、しばらくして、遠くの方から、一郎太豆の陽気な声が返って来ました。どうやら、とうとう莢の外へ出た一郎太豆は、もう楽しくってたまらず、箱のなかを、ぴよんぴよん、あちこち飛び回っているといったようすです。

なるほど、箱のなかは、一郎太豆と同じように、真っ先にそれぞれの莢のなかから飛び出してきた威勢のよい仲間たちで、早くも大賑わいです。その日初めて顔をあわせる親族や、ご近所さまたちが、ごちゃごちゃに入り混じって、挨拶を交わしたり、おしゃべりを始めたりしています。ふと見ると、豆太郎

兄弟の莢のなかにだって、もう、二郎太豆がひとり、ぼつんと残っているだけです。みんな、おじいさんが箱をかざごと揺するたび、さあ、一郎太豆兄さんに続けとばかりに、元気に、外へ、飛び出して行きました。

二郎太豆だけが、いつまでも、執拗なほど破れた莢の内側にへばりついていました。今、外へ飛び出して行ったりして、万が一にも、だいじな顔に傷をつけてはおおごとです。外のお祭り騒ぎがまるで気にならないと言ったら嘘でしたが、これもまた一級品に生まれついた辛さですから、ここは二郎太豆としても、ぐっと堪えて、辛抱するほかはないのです。

よく晴れた輝く夏の盛りの空の下、こうして、その日、それぞれの収穫を迎えた豆太郎兄弟と、他、段ボール箱にいっぱいになったえんどう豆たちは、おじいさんの家の納屋に、わいわい、がやがや、大集合。間もなくお迎えにやってきたトラックの荷台にのせられて、町の組合へと運ばれて行きました。

トラックが、道のでこぼこにぶつかって、右に、左に、揺れるたび、別のえんどう豆の莢が破れ、また別のえんどう豆の莢が破れ、後から、後から、飛び出すえんどう豆たちで、それは賑やかな、愉快的な、愉快的な、旅でした。

### 三

さて、トラックが組合に着く頃には、豆太郎兄弟も、もうすっかり離れ離れになっていました。誰が、誰を、呼んだところで、誰も、返事をしてきません。そもそも、誰も、誰を呼ぼうなどということは、思いもしません。行く先々で新しい友達に次から次へと出会うものですから、楽しくって、楽しくって、もう誰もそれどころではありませんでしたから。

さあ、選別作業の始まりです。

まずは一郎太豆が、からだの頑丈な、カもち組に分けられました。カもち組は、そのまま缶詰工場へ運ばれて、缶詰になるのです。それから再びトラックに積まれて、今度は空港へ向かいます。いよいよ飛行機に乗せられて、いざ、遠い外国へ出発です。

しかし、それは決してらかな旅ではありませんでした。 缶詰のなかはまっ暗で、息苦しくて、それにびちゃびちゃと水浸しだし、おまけに飛行機のなかの積荷置場といったら、もう、寒くて、寒くて。 みんながたがた震えるほどです。 飛行機が気流にぶつかるたびに、機体が浮いたり、沈んだり、いくら筋肉隆々の仲間たちの集団と言えども、途中でさすがに気持ちが悪くなって、なかにはとうとう潰れてしまうものさえいました。

それでも、一郎太豆はへっちゃらです。 だって、一郎太豆には、遠い外国へ行って、そこで、びっくりするようなものをたくさん見たり、困っている人たちを助けてあげたりといった、とても大きな夢がありましたから。

長く続いた辛い旅の果てに、一郎太豆たちがようやくたどり着いたのは、とても暑い国でした。 缶詰をきりきりと開ける音がして、そのたびに、外の、目を射るような眩しい光線と、うだる熱が射し込んできます。 缶のふたが開いて、あらびっくり！ 一郎太豆たちが見たものは、まっ黒い黒人の男の子。 大きな瞳が、ぱちくりこちらを見えています。

それに、そう。 そろそろ缶詰のなかのまっ暗闇にすっかり慣れきっていた一郎太豆の目の前に、突如、広がった途方もなく大きな空の、高くて、濃くて、深い、深い、その真っ青といったらー。 それは、今まで一郎太豆が一度だってみたことがなかった空、黙って見ていると、吸い込まれていってしまいそうな空でした。 どこまでも深い、海みたいな、空なのです。 まっすぐ伸びあがっていく、太い、遥か太古からの木々だって、おかしな、不思議な、ひょうきんな、すがたをして、によきによき並んで立っています。 その足もとに生い茂った、草の緑色、土の金色、どれもこれも、強い陽射しを真っ向から跳ね返して、キラキラ、キラキラと、目に痛く輝いて、まるでみんな燃えているようです。

一郎太豆は夢をかなえたのです。 そしてやがて、温かくて、とてもおいしい、えんどう豆のスープになったのです。 一郎太豆の入ったえんどう豆のスープは、ひとかたまりのパンといっしょに、やせっぽっちの、ひとりの若いお母さんの口に入りました。 その若いお母さんには、たくさんの子供たちがいました。 そろって、痩せて、つらい、かなしい、泣きべそ顔をしていました。



お母さんが大事そうに両腕でかかえていた、生まれて間もない、とても小さい赤ちゃんなどは、ほんやりとして、ほんとうに今にも死んでしまいそうでした。みんな何日も食べるものがなくて、お腹がぺこぺこだったのです。お母さんも、子供たちも、一郎太豆の入ったスープと、ひとかたまりのパンを、いったいどれほどおいしく食べたか、知りませんでした。何度、おいしい、おいしい、と言って食べたか知りませんでした。お母さんのからだのなかに入ってからも、カモ치의豆たちは少しも休むことなく、急いでお母さんのお乳のポンプを押しました。力をあわせて、よいしょ、よいしょ、と働きました。すると間もなく、今まで少しも出てこなかったお母さんのまっ白いお乳が、どんどん出てくるようにもなりました。それを飲んで、赤ちゃんも、ようやく息を吹き返しました。

ああ、やれ、やれ。

まずは、これで、ひと安心・・・。

ほっとひと息ついた一郎太豆は、そのとき、なぜか、ぽっと、弟の二郎太豆のことを思い出したのです。莢のなかでは、ずっとすぐとなりにいたというのに、気がついてみたら、なんとも、まあ、遠く、離れ離れになってしまったものでした。二郎太豆は今頃どうしているだろう、そう思わずには、いられないのでした。

そういえば、二郎太豆は、遠くへ行くということは、あちこちごつごつとぶつかるとのことだから、自分は遠くへは行きたくない、などと言っていたっけ。なるほどなあー。

あのときは、難しくて、あまり分らなかったことを、今では、一郎太豆が、誰よりいちばん良く知っていました。

一郎太豆は、いつもとなりにいたあの二郎太豆に、とても会いたいと思いました。そして、一郎太豆が見てきたものや、してきたことや、出会った仲間たちのことを、ぜんぶ話してあげたいと思いました。それを聞いたら、あの二郎太豆だって、きっと、すごく羨ましがるに違いないと思ったのです。

#### 四

それでは、二郎太豆は、どうしていたでしょう。

その頃、二郎太豆は、決して遠くない、海沿いのホテルの、とても立派な厨房に送り届けられていました。いつまでも、お利口にして、じいっと莢の内側にいたのですから、もちろんご自慢のお顔には傷ひとつなく、選りすぐりの仲間たちと、上等の木箱にきちんと並べて詰められて、じつに快適な旅をしていました。

仲間の豆たちは、どの豆をとっても、あの段ボール箱のごたごた騒ぎの、まったくどこに隠れていたのかと思うほど、身なりも正しく、話し方も上品なえんどう豆揃いでした。送り届けられたホテルにしても、古くて、たいへん格式高いホテルでしたし、その厨房で指揮をとる総料理長にしたって、超一流、フランスで修業を積んだ、本格派、とても有名なシェフでした。

それにしても、その日の厨房は、ひどく緊張しておりました。どの料理人も、皆、神経をぴりぴりと尖らせていました。あちこちから集められてきた高級食材たちも、さすがにこちこち。誰もが、一様に硬くならずにはいられないのでした。それも、そのはずです。天皇陛下とおっしゃるたいへんに偉い方が、どうやらお昼を召し上がりにはいらっしゃるというのですから。

これはなんとも名誉なことだぞー。

喜んだ二郎太豆は、仲間のえんどう豆たちと、勢いよく、煮立ったお鍋のなかへ、ざざざざーっ。湯上りに、最上級の白ワインをきかせたホワイトソースで、とびっきりのおめかしを決めてもらって、もう、なんとも言われぬ良い気分です。銀のお皿にのせられて、ぴーんと張った白いテーブルクロスの上へと、たいそううやうやしく運ばれて行きました。

一ふと、あたりを見回してみますと、どの豆も、まあ、ほんとうにひどいあがりようでした。皆、顔から、ぽっぽっと白い湯気をあげていました。それでも、二郎太豆だけは、大丈夫。なぜって、お行儀のよさにかけては、あの、かわいい弟の三郎太豆のお墨付きです。真赤に湯であがった伊勢海老の横で、ころころと転げて、きちんとお辞儀をすることだって、決して忘れることがありませんでした。

二郎太豆は、三郎太豆のことを思い出していました。 そういえば、学校へ行きたいと三郎太豆が言ったとき、笑ったりして、ちょっと悪かったな、などとも思ったのです。 いつもとなりにいたあの三郎太豆に、とても会いたいと思いました。

三郎太豆は今頃どうしているだろうな・・・。

そして、あのまじめな弟豆が、まあ、今どこにいたとしても、きっと、どこかでいい旅をしているといいなあと、思ったりしていました。

## 五

それでは、三郎太豆は、どうしていたでしょう。

その頃、三郎太豆は、たくさんのえんどう豆たちといっしょに、ビニール袋に詰められて、どこか、まっ暗で、うすら寒い場所におりました。 最初のうちは、それでも、涼しくて、けっこう気持ちよかったのですが、あまりに長くそこに居たので、どうにもすっかり冷えきってしまいました。

いったいここはどこだろう。 僕はどうなってしまおうだろう・・・。

ときが経つにつれて、不安も大きくなって、仲間のえんどう豆のなかには、いよいよめそめそと泣きだすものもいるものですから、さすがの三郎太豆も、少し心配になってきました。

「ここはどこ？ 僕はこんなに暗くて寒いところは嫌だ。 凍えてしまう。」

とうとう、えんどう豆が一粒、声をあげて泣き出しました。

「わたしだって。 こんなことなら、おうちへ帰りたい！」

どこかで、べつのえんどう豆も、泣き声をあげました。

つられるようにして、みんなが口々に、不平を言い始めました。僕は暖かいところに行きたかったのに。わたしは賑やかなところが良かったのに。僕は都会へ出てみたかったのに。わたしは静かな田舎暮らしが良かったのに……。僕は商店街に並びたかったのに。わたしはデパートに並びたかったのに。僕は肉屋で、熱々のコロッケになりたかったのに。わたしは洋食屋で、ふわふわのオムレツにのりたかったのに。僕は、えびシューマイに。わたしは、かにピラフに……。なんにも言えず、ただひたすらパニックに陥るものもあるかと思えば、その一方で、やけに冷静に会議を始めるグループも現れました。原因の分析と、現状の打開案について。 うんぬんー。

三郎太豆は、その間も、ひとりで静かにしていました。すると、誰かが声をかけてきました。

「きみは？ きみはどこへ行きたかったの？」

三郎太豆は、これを言っではまた笑われるなぁと思わずにはいられませんでした。だけど、それだって、もう構うことはなかったのです。

「僕は、学校へ行きたかったんだ。」

胸を張って、そう答えました。

すると、意外だったことに、笑うものは、ひとりもありません。それどころか、まわりのみんなは、少し感心をしたような様子で、三郎太豆を見たのです。

「ーそれだったら、この近くに、大学がひとつあるのを知っているわ……。わたしの妹は、わたしたちより、ふたつ、みっつ後ろの袋詰のなかにいたけど、たぶんそっちの方へ運ばれて行ったと思う……。」

誰かが、そう言いました。

「まあ。ふたつ、みっつですって？ それは惜しかったこと……。」

別の誰かが、残念そうにそう言いました。

そのときバタンと音がして、ドアが開きました。とたんにみんな目を閉じて、得意の寝たふりをしました。

ところで、これはドアが開いて初めて分かったことなのですが、三郎太豆たちが居たところは、どうりで暗くて、寒いわけです、冷蔵庫のなかだったのです。（これは、実際、長い間居るには、なかなか辛い環境です。 いっそ冷凍庫のなかだったら、皆ぐっすり冬眠が出来たのです。） そうしたわけですから、いざ外へ出てみれば、もう別に寒いということはありません。 いえ、いえ、それどころか、あたりには、温かくて、香ばしいにおいがいっぱいにたちこめています。そこは、町のパン屋さんでした。

ステンレスの調理台の上で、袋詰の仲間たちは、さっそくばらばらになりました。あるものは、サラダになりました。あるものは、小エビや鶏肉と合わさって、ほかほかのパイになりました。ツナといっしょに、ピザになるものもありました。とてもおかしかったことには、みんなさっきまであれほどぐちぐち文句を言っていたくせに、いざ店先に並んで買われていく頃にもなると、どうしたわけか、誰もが一様に、とても幸せそうに、嬉しそうに、にこにこ笑っているのです。

三郎太豆は、サンドイッチのなかみになったのでした。そして間もなく店にやって来た、チェック柄の長シャツを着た男の子に買われて行きました。

僕はいったいどこへ運ばれていくんだろうか・・・。

三郎太豆を買った男の子は、夏の日差しがまだ強い店の外へと出て、最初の果物屋さんの角を曲がり、大通りに出ました。青信号を渡って、道路の向こう側に出ました。前には、大きな石門が見えます。その向こうには、長く続くイチョウ並木があって、その先には、古い時計台が見えます。さあ、どこでしょう？

建物のなかの空気は、すこしひんやりとしていました。夏休みの最中の廊下には、生徒は誰ひとりとしておらず、あたりは、ただ、しいんと静まり返っ

ていました。廊下の両側には、整然と教室の引き戸が並んでいました。そのうちのひとつを開けて、男の子は、教室のなかへと入って行きました。

なかでは、だぼだぼの白衣を着た白髪のが、たったひとりきり、大きな机に向っていました。机の上には、広げたたくさんの厚い本や、ノートや、まるめた紙や、ペンや、分度器や、コンパスや、電卓や、そういったものが、ごちゃごちゃと散漫に置かれています。先生は、男の子が教室に入ってきたのをまるで気にも留めない様子で、ただ、もくもくと、何かをノートに書きつけているようすでした。

「先生、お昼を買ってきましたよ。」

男の子がそう言って、三郎太豆の入った紙袋を、そっと机のすみに置きました。すると、ようやく一度だけ、ちらりと顔をあげて、

「おや、きみだったのかい。 やあ、ありがとう。 手間をかけたね……。」

と、言いました。

「先生、もうその問題にとりかかってから今日で数えて三日めですよ。 どうか少し休んでください。」

男の子は、気遣って言いました。 しかし、返事はありませんでした。

「そんなに根をつめてはよくありませんから……。」

「……」

それでも、先生はなににも言いませんでした。 そのうちには、頭を抱えてうんうん唸り始めました。 なにしろもうじき大事な学会があって、論文を発表しなければならないというのに、今、この直前の時期にきて、とてつもなく重大な計算のミスに気がついてしまったのですから。

もう、あまり時間も残っていません。

さあ、大変だ。

いや、はや。 困った、困った・・・。

大好物のポテトサラダサンドイッチを目の前に置かれても、もはや一向に手が止まることはありません。 気がつくと、男の子も、いつの間にか教室を出て行ってしまっていて、もういませんでした。

再び静まり返った教室のなかに、先生のたてるペン先の音だけが、いつまでも、するする、するする、きこえます。 三郎太豆は、どうにも気になって、どうしようもなくなって、思わずフランスパンの間から、そうっと身をのりだして見てみました。 先生のペン先が、次から次へ、摩訶不思議な記号を書き出していくのが、とてもよく見えます。 その、胸わくわく躍ること！ 三郎太豆は、楽しくなって、いつまでも、夢中でそれを目で追いかけてました。 ふと、先生のペン先が止まりました。

あれ、どうしたのかな？

不思議に思った三郎太豆が、おもむろに視線をあげていきますと、どうにもたいへん気まずかったことに、同じようにじいっとこちらを見下ろしている先生と、ぴたりと目が合ってしまった。

・・・。

先生だって、本当は、もうおなかがぺこぺこだったのです。

まずはお昼を食べないことには、この先、どうにも始まりません。

一と、いったところですよ。

ちょっと、飲み物を買って来ることとしよう。 握っていたペンをようやく机の上におくと、教室の外へ、出て行きました。

さて、さて、誰もいなくなった教室のなかで、今度は、今までずっと押し黙っていたサンドイッチが騒ぎ出しました。

「良かったなあ、三郎太豆。ちゃんと夢がかなって学校へ来れたじゃないか！」

ハムが言いました。

「まったくラッキーだよ、きみ。世の中、なかなかこううまくはいかないものさ。」

じゃがいもも、大きくそう頷きました。

たまねぎもたまごもにんじんも、もちろんほかのえんどう豆の仲間たちも、みんな、三郎太豆の話を聞き知って、いつしかもう、その話で周囲はもちつきりになりました。みんなそれこそ大喜び。フランス産のオリーブが、びっくりしたようすで、いったいなんの騒ぎですか、と尋ねたので、フランスパンが、通訳をしてあげたのでした。フランスパンは、フランスパンといえども、なかみは立派な国産小麦だったので。

サンドイッチを食べた先生は、もう一度ペンをとり、同じ課題にとりかかりました。そして、それはお腹に入ったサンドイッチが、お腹のなかで、みんな、わっしょい、わっしょいと、力をあわせて応援をし続けていたからのことでしょう、そのうちぱっと明るい顔をして、

「そうか！ 出来たぞ！」 と、言いました。

そして、あわてた手つきで書き連ねた数字と記号を、いくつか戻って、消して、書き直しました。あとは、もう、すらすらと、支えていた問題を解いていくばかりです。

お腹のなかで、三郎太豆は、どうしたわけだか、だんだんすごく嬉しくなっていきました。お兄さん豆たちに言われたとおり、たしかに、子供たちと学校でいっしょに遊んだり、机をならべてお勉強したりは出来ませんでしたけれ



ど、それでいて、三郎太豆だって、こうしてみれば、なんだかいろんなことを教わった気がしたのです。

## 六

それでは、四朗太豆は、どうなっていたでしょうー？

こうなると、やはり気になって、気になって、しかたがないのは、四朗太豆の身の上のことです。四朗太豆は、いったいどこでどうなっているでしょうか……。

四朗太豆。 四朗太豆。

ところがとても困ったことに、四朗太豆だけは、どこを探しても、ずっと見当たらずにいるのです。

あの朝、運ばれていった段ボール箱のなかにも、それを積んだトラックのなかにも、どこにも、四朗太豆の姿はありませんでした。

それも、そのはずです。小さな四朗太豆は、ほんとうはおじいさんの畑が大好き。まだ、どこへも行きたくなかったのです。お兄さん豆たちとも離れたくなかったし、育ててくれたおじいさんとも、もちろんみのるくんとも、まだ別れたくありませんでした。

段ボール箱のなかですっかり気のりがしなくなってしまった四朗太豆は、ひとり、ひそかに意を決すると、出荷のときにえいっと箱の外へ逃げ出して、なんと、あれからずっと、おじいさんの家の納屋のなかに、隠れていたのです。

けれども、一度えんどう豆の木から摘み取られてしまっちは、もう、誰も、四朗太豆のことなんかお構いなしです。あれだけいた大勢の親族たちも、ご近所さまも、みんな、とても楽しそうにトラックにゆられて、後から、後から、おじいさんの畑を出て行くばかり。もう、強い一郎太豆兄さんも、格好いい二郎太豆兄さんも、優しい三郎太豆兄さんも、誰もいない。気がつくと、四朗太豆は、まったくのひとりぼっちです。

おまけに、友達と思っていたみのるくんは、新学期が始まると、もうすっかりおじいさんの畑に来なくなったし、そのおじいさんといえばおじいさんで、ひと仕事が終わった今は、母屋の縁側で、足を伸ばして、おばあさんとお茶を飲んでいる毎日です。

納屋のなかは薄暗いし、じとじとしているし、夜になればねずみがでてきて、何度も危うく齧られそうになるし、四朗太豆は、もう、寂しいやら、心細いやら、納屋のすみっこに立てかけられた鍬の影に身を寄せて、毎日、しくしく、泣いていました。

「こんなことになるなんて。 お兄さん豆たちは、みんなどこへ行ってしまったろう……。 怖いよ。 畑に帰りたいよ。 ひとりぼっちは、嫌だよ……。」

来る日も、来る日も、泣いたので、四朗太豆はすっかり干乾びて、いつしかからからになってしまいました。

夏はもうとっくに過ぎて、何日も、寒く、悲しい雨が続きました。 四朗太豆は、ぽつんと納屋にひとりぼっち。 誰も気づいてくれません。

けれども、それはそんなある日のことでした。 不意に、ずっと閉まりっきりだった納屋の扉が開いたのです。 驚いて、そちらを見ますと、おじいさんが立っていました。 嬉しかったことには、その横には、みのるくんもいっしょです。 長く続いた雨のせいで、おじいさんの家の庭のあちこちに雑草が生えてしまい、それを刈るために、納屋に立てかけておいた鍬が必要になったのです。 おじいさんがひょいっと鍬を取ろうとして、干乾びた四朗太豆を転がしました。

「おや、こんなところにえんどう豆が落ちているぞ。 きっと、出荷のときに、箱からこぼれたんだな……。」

けれども、おじいさんは、どうにも困ってしまいました。 そういったところで、もう来年のえんどう豆の種まきは終わってしまっていたし、たった一粒のえんどう豆が見つかったところで、今更、もうどうしようもなかったのです。

おじいさんは、四朗太豆を摘まみあげ、ぽいっと外へ投げてしまおうとしました。

そのとき、いつも気が弱くて、おじいさんの後ろに隠れてばかりいたみのるくんが、おじいさんを止めたのです。そして、おじいさんが驚いてしまうほどの大きな声で、とてもはっきりとよく分かる声で、こう言いました。

「おじいさん、待って。その豆を僕にちょうだい。うちの庭に蒔きたいから。」

みのるくんのそのときの、その大きな声には、おじいさんも驚きましたが、四朗太豆は、もっとびっくり。だって、みのるくんのうちの庭に植えてもらえたら、こんなに良いことはありません！

みのるくんは、家に帰って、庭に小さな穴を掘ると、そこに四朗太豆を蒔きました。幸い、雨で、土はしっとりとして湿っていましたが、干乾びた四朗太豆も、すぐにもとどおりになりました。土のなかですんずんと元気を取り戻した四朗太豆は、もうすぐにだって、頭のとっぺんから、白い芽を吹き出したいくらいでした。でも、だからって、あまり早く芽を出して、ちょっとおかしいと思われてもいけないので、せめて、一週間は、土のなかで、じいっと待つことにしました。

あと一週間したら、四朗太豆は、元気いっぱい、土の表面を割って芽を出すでしょう。そして、春には、ぐんぐんと背を伸ばして、枝々にいっぱいのえんどう豆の兄弟たちを、また、たくさん、たくさん、実らせることでしょう。

良かったね、四朗太豆。もう、寂しくないね。